

# シンポジウム I 守るべきいのちと尊厳

10月17日(木) 10:00～12:00 第1会場(広島国際会議場 B1F フェニックスホール)

## S1-2 広島から考える“命と尊厳”の原点

日本赤十字国際人道研究センター 所長／日本赤十字秋田看護大学 特任教授

いのち え た だ お  
井上 忠男

国際赤十字・赤新月運動の行動規範である赤十字の基本原則は、赤十字の目的は「命と健康を守り、人間の尊重を確保することにある」(人道の原則)と宣言し、「人間の命と尊厳を守ること」が赤十字のレゾナードール(存在理由)であることを明確にしている。

「人間の命と尊厳を守ること」は、国家、民族、宗教を問わず今日の国際社会がその実現を目指している普遍的価値であり、国際司法の最高の権威とされる国際司法裁判所の判決(1986)も人道支援の要件として赤十字基本原則の上記文言に言及している。

人間の命と尊厳を守る法的な枠組みとして、赤十字がその推進役となっている国際人道法や国連などが推進する国際人権法があるが、これらの人道・人権の保護規定が確立されるきっかけとなったのは第二次世界大戦時に人類が体験した言語に絶する悲惨な体験にあった。それがナチス・ドイツ下で起きたユダヤ人の大量虐殺(ホロコースト)であり、広島・長崎の原爆投下に象徴される一般市民への無差別大量虐殺だった。前者は戦後のニュルンベルグ裁判で「人道に対する罪」として断罪され、戦後世界は、これら人類の重大な過ちから生命と人間の尊厳の不可侵を宣言し、国際人道法(ジュネーブ諸条約)の全面改定や世界人権宣言を始めとする人権規範を発展させた。赤十字は、それ以後も国際人道法の発展に寄与することで戦争犠牲者の生命と安全を保護するとともに、戦時平時を問わず、苦痛にあえぐ人々への医療・救護活動を展開し、現在に至っている。

戦後75年を迎えようとする今日、命と尊厳に関わる人権と人道の現状は大きく変化し、より複雑多様な課題を抱えるようになっている。例えば、日本では親による幼児の虐待死や通り魔殺人(拡大自殺、道連れ自殺)など、戦時でもないのに軽々に人命が奪われ、また学校でのいじめといじめ自殺など、形を変えた命と尊厳への脅威が日常的に社会を覆っている。さらに深刻で拡大する世界の難民問題やLGBTの権利擁護など人権を唱える主体も多様化し、それぞれの人権観、尊厳観に基づき人権を主張する時代になり、誰もが最低限共有できる命や尊厳を定式化することは必ずしも容易ではない。また医療技術や生命科学の進歩により、かつての素朴な生命観や死の観念が揺らぎ、クローン技術や脳死問題など「命とは何か。尊厳とは何か」といった難解かつ根源的な問いに直面している。そうした中で「赤十字の生命観はいかなるものか」と問われれば一様な答えはないのかもしれない。少なくとも赤十字は社会の合意形成が困難なそうした“神学論争”からは距離を置き、徹頭徹尾、日々の人々の暮らしと泥臭く向き合い、人々の素朴な生と死に向き合ってきたよ

うに思う。

赤十字は150年の長きにわたり、一貫して人々の命と尊厳の保護者であり、推進者であった。その方法は、①法による規制(国際人道法の発展) ②医療・救護活動 ③教育活動(普及啓発)の3つのアプローチであったように思う。中で最も直接的に人々の命と尊厳にかかわってきたのが医療・救護活動であった。

広島から考えるこのセッションは、赤十字というミッションの原点を確認する機会でもある。それは被爆直後にわが身の危険を顧みず犠牲者の救護に身を捧げた病院職員や若い看護学生らの行動に具現化されていた。その「思い」を引き継ぐのが赤十字の使命でもある。